

馬場孤蝶

上田敏君

上
田
敏
君

僕が上田君に初めて会ったのは明治廿七年の初め位のことであつたと思います。後でもそうですが色々と変わる人もありますが、見たところの上田君は余り変らなかつた様です。若い時の上田君は勢のいい、洒落た事を言う人でした。学問好きで、本好きで、よく色々なものを読んでいました。トルストイの『クロイツェル・ソナタ』などを上田君が、馬場が面白がる馬場向きの本だと云つて、貸て呉れたこと等がありました。その時分には平田

秃木、戸川秋骨の両君が池之端七軒町の同じ下宿屋に下宿していましたので、上田君も、よく来て話をしました。

『文学界』の連中では、平田君が一番上田君と親しかつたようで、たしか高等学校で同級だったかと思えます。之で上田君を仲間へ引き入れた訳なんです。上田君はひどく勢がよかったと申しましたが、大變に上品で、若い内にも、余り乱暴なことなどは云いませんでした。大分一葉の日記の中にも出ていますが、上品で落着いた、穏やかな人と書いてあります。

『帝国文学』などの出来だしたのはあれは三十年頃でし

たろうか、その時分からか、その少し前からか、一体『文学界』に従来の関係者も吾々もあまり筆を執らないようになって、上田君は『帝国文学』の方へ多く筆を執りました。で、二十八年頃から私は地方へ出ましたから、その間の上田君は知りません。従って上田君の処へは暫く行きませんでした。それから三十五年頃から又上田君に会ったりしました。それは上田君が僕より前に『明星』へ物を書き、僕も平田君に勧められて『明星』へ原稿を書き、そんなことで、又上田君と親しくなる様になりました。そうして三十七年頃からですか、よくあの西片町

の上田君の許へ行つて夜中まで話したものです。

其時分森田草平、生田長江、栗原古城、中村古峽、川下江村、五島駿吉、辻村鑑などの諸君が集まつて『花雲珠』と云う回覧雑誌を出していたのでしたが、僕は偶然に諸君と親しくなつたのでした。その連中は上田君の教えを受けるようになったところから、皆一緒に集つて雑誌を出そうと云う事になり、銀座の細川芳之助君に島崎君が口を利いてくれて、金を出して貰うことが出来たので、三十九年に出し初めました。それは、上田君と僕とが監督して、生田森田両君が重に書くかたちでした。そ

の雑誌は上田君が前にやっていたことのある『芸苑』の名を今一度使う事になって、暫らくこれをやっています。たけれ共、その内に吾々どもが飽きてしまつて遂にやめました。

上田君が洋行して、やがて帰つて来るや、京都へ行つてしまいました。親切な人でよく訪ねては呉れましたので、僕も会える機会を求めて会いました。年に一二度で、而^しかも僅かしか会いませんでした。それで最後に会ったのは大正四年九月頃で、色んな話をした末に頻りに東京へ帰住の事を話しましたが、いずれそうする

積りだと云っていましたが、一寸の間話したに過ぎませんでした。——何でも九日の夜九時頃に、与謝野君が入沢博士から上田君が危篤だとの知らせがあつたからすぐ行くと言つて来たので、私も一緒に行きました。九日の三時に死んだのでしたから、死顔を見て引取つた様なわけです。どうも帰朝後身体が悪くなつた様です。三十四五年頃迄酒を飲んで、可成り強かつたらしいのです。尤も若い時分にはさして飲まなかつた様ですし、仲間に飲み手がありませんから、酔つたのを見ませんでした。病気は胆石、黄疸、中耳炎、腎臓炎と色々あつたので、

そんな病気が重なった結果であつたのでしよう。六日に
帰京して、八日の午前中に急に悪くなつて、それで知覚を
失つて、その日に亡くなつたといふのです。

考えて見ると、どうも上田君は、所謂学者であつて、
作家であるにはも少し、一体にくだけていなくてはいけ
なかつた様です。どうも堅いところが少しあつて邪魔を
したものの様です。誰一人として、上田君の馬鹿々々し
いことをやっているところを見た人はありますまいし、
一緒に暴れて、後で馬鹿話をする様な友達が極めて――
あつたかもしれませんが――少かつたろうと思ひます。

話の面白い上手な人でありましたが、どうも人の話を聞き上手ではなかったと思います。どんどん話して、聞き手は大変いいが、此方の話をする機会がない、間へ口を挿むことができないという風に思った人があるかも知れません。比較するのは面白くないが、夏目君の応待振りは実に巧いものです。自分から話を持ちかけて、相手に話をさせ乍ら、自分が、其間に口を入れて、相当に話すと云う遣り方です。色々と性格の上の関係其他もあります。夏目君は練れた遣り方です。上田君にはまだ練れないところがありました。之れは年齢の相違や、色々

なことから来ているでしょうが。

上田君の文学界に於ける功労は、まず早い時分に新しい外国文学を紹介したにあるので、殊に三十八年に出したんでしたが『海潮音』は仏蘭西象徴派の詩人の訳詩集で、これは当時の詩人のいい教科書となり、当時の詩の傾向に大影響を与え、随分あれのお陰で自分たちの作風をきめた人の多いのを認めます。文学界に影響の大きな点では著書中『海潮音』が一番注目すべきものだと思います。

今から思つて惜しいのは、色々な都合もあつたでしよ

うが、京都へ行つたことです。自分でも余程淋しかったのではないかと思ひます。吾々は田舎者ですから、何処でもさほどの違いはありませんが、上田君の様に、父祖伝来の東京人が、京都へ行つて、長く暮すのは、色々な趣味の上から、何だか、ひどく外の土地へ行つたと云う感じが強かつたろうと思われます。若い時分に、まだ大学の時代や、卒業して早々の頃には旅行をしない方でした。田舎は嫌いだと云つて、余り出掛けませんでした。少し自分の趣味の上の負け惜みもあつたでしょうが、兎に角嫌いだと云つていました。其処から考えても、京都

行きは随分嫌だったろうと察します。それからどうも一寸彼方の人と趣味も調子も違うから、上田君の様な人は、京都の文科にはえら過ぎたかも知れません。従って学生等が、一寸上田君の面白いところを認め得なかったのかも思われます。謂わば上田君の様な洗練された気取つた趣味は、上方の人には、どんなものでしょうか。その感じが徹底しなかつたかと、どうもそう思われます。私
は行く時も気の毒だと思いましたが、会う度さそに、嘸不自
由だろうと思つていたのでしたが、最近には何だか転任
の出来そうな話を聞いて結構なことだと思ひましたの

に、沙汰止みらしかったのです。とは云うものの、遠からぬ将来には帰住ができるものとして待っていたのでした。吾々の中では一番若い方で、身体も壮健な人でありましたから、こう早くとは思いませんでした。友人達誰も皆意外であつたことと思います。

今にして思うと、上田君は淋しい生活を送つた人と云わねばなるまいと思います。外的に見れば、順境にも見えませんが、当人はどう思いましたか知らん、も少し真個に人間同士打突かる様な生活を送ると云う性格であつたらよかつたでしょう。然し人各々生れつきがありますし、

当人の心次第のもので、自分でも満足していただらいいのですが、我々他人が自分の心持からいうと、もつと、くだけた生活を上田君がやれたら、よかつただらうにと今でも思います。

上田君に就いては、幾ら考えても逸事と云つたようなものが思い出せません。又大笑いの種となる様な例を見ません。一つ二つはあつてもいいのでしように、吾々は少しも知りません。そんな風ですから、若い人などは、どうも、その或る程度以上に、上田君に親しむようなことが、あまりなかつた様です。何だか近来になつては、

大分、自身でも淋しく思っていたのではないかと思われ
る事があります。すると、淋しいとか心細いとかを余り
人に告げない人で、いつも勢よく見えただけ、それだけ
に尚お気の毒だと思います。

日本文学電子図書館

上田敏君

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館